

BALZAC におけるユートピア的 世界像の形成と階級意識

——「田舎医者」論——

草 壁 八 郎

I

Le Médecin de Campagne (1832年9月—1833年7月)¹⁾ は、それまで一連の作品においてブルジョア社会に対して批判を加え、文明を断罪してきた BALZAC が、ここではじめて建設的な解決策を提案したことにおいて、意義をもつ。BALZAC の創造的精神の positif な詩的結実が認められるのである²⁾。しかし同時に、*Le Médecin de Campagne* の世界は BALZAC のユートピアであると言われる。そうとすれば、その世界がユートピアである所以はどこに在るのであろうか。P. CITRON によれば、先ず作品の構成に在る。つまり、*Le Médecin de Campagne* は Genestas という老軍人が未知の国を訪れ、例によって歓待され、いろいろ説明されるという、ユートピア小説の伝統的な形式をとる作品なのである。第二に、主人公 Benassis の村造りが何ら現実的な困難に会うことなく、奇跡的に遂行されることに在る³⁾。また *Echo de la Jeune France* の書評によれば、Benassis の「村」が、「そこでは木々には蜂蜜が滴り、小川には牛乳が流れている」といった「子供じみた空中楼阁」であることによる⁴⁾。勿論《Pays de cocagne》の主題はユートピアの不易の特性であり、従ってこのような批評も確かに作品の一面を衝いているのである。とはいえ、*Le Médecin de Campagne* は単なる素朴な豊饒のユートピアではない。BALZAC にとって必要なのは、理想国家の見取図だったのであり、それも抽象的一般的な理想的パターンではなく、*Le Médecin de Campagne* は、産業革命が本格的に進行しはじめたフランスの調和的な発展に関して、BALZAC が実現可能とみたものを殆んど実現していると言えよう。それ故、BALZAC は彼のユートピアを遠い未来に置かなかつたし、またフラ

ンスの国外に建設しようとしなかったのであろう⁶⁵。それではBALZACはどのようなユートピアを築き上げようとしたのであろうか。ルカーチによれば、BALZACのユートピアとは、イギリスの状態を理想とした「大土地所有と農民との間の調和」ということである。ところが、それはフランスとイギリスとの歴史的プロセスの相違を無視した空想的条件に基づいているという意味において、まさしくユートピア的幻想なのであり、BALZACは彼の主観的な世界観によって歪められた世界像を提示しているのである⁶⁶。しかし、このイギリス・ユートピアは、ルカーチが*Le Médecin de Campagne*と共にユートピア小説と断定する*Le Curé de village*において最も鮮明に現われるのであり、少なくとも*Le Médecin de Campagne*におけるBALZACの大土地所有の擁護は再検討を要する問題なのである⁶⁷。そうとすれば、*Le Médecin de Campagne*において、BALZACは変革の過程をどのように説得しようとするのか、換言すれば、ユートピアの基礎を何に求めたのであろうか。またBALZACのうちには、それを実現可能と確信させる何かがあったのであろうか。

ところで、ユートピアは願望の象徴、また理想的な想像国家と定義されるのであるが、それは同時に現存社会体制の反定立として現われる。その場合留意すべきは、ユートピアが純粋に個人的な願望ではあり得ないということであろう。個人としての願望も現存社会体制の批判も共に、ユートピア作者の属する社会階級、およびその階級が他の階級とのかかわりあいにおいて演じ、また演じようと望んでいた役割によって、決定的な影響を受ける。というよりは、寧ろ或るユートピアはその役割の最も鮮明な表現であると言えよう。無葛藤と言われる*Le Médecin de Campagne*においても、ユートピアの指導者たちの意識を支配しているのは現実社会の激化しはじめた階級闘争なのである。そのような階級的対立に直面して、BALZACはどのように対処しようとしたのであろうか。*Le Médecin de Campagne*と*Le Curé de village*において、各社会階級に対するBALZACの態度は明らかに異っており、それが夫々のユートピアの性格を規定していると言えるのである⁶⁸。従ってこの観点からすれば、BALZACが何故そのようなユートピアを描かなければならなかったかを解明し得るのではないだろうか。

*Le Médecin de Campagne*の成立過程およびこの作品におけるBALZACの政治観、社会観、宗教観については、既にすぐれた研究が行われている。

本稿はそれらの研究成果に立脚した上で、BALZACのうちにユートピア的世界像が形成されるにいたった心理過程を、この作品における彼の階級意識を通じて解明しようとする一つの試みである⁹⁾。

II

Le Médecin de Campagne は、医師 Benassis による「地上の最も貧しい一隅」の文明化、「貧困階級の境遇」の改善 (M. 57, 60) を主題とした作品である。Benassis の改良事業は、病人の看護、衛生状態の改善、道路の敷設、牧草地の灌漑、荒蕪地の開墾、農業の近代化、新しい産業の誘致、生産物の販路の拡張等を主な内容としているが、ここで注意すべきは BALZAC の産業の重視であろう。*Le Curé de village* では、大土地所有に基づく大農経営、農林畜産物の大規模生産のみを目的とする改良事業が行われるのに対して、ここでは村の繁栄の原理は、「欲求が産業を生み、産業が商業を、商業が利潤を、安楽が数々の有益な考えを生む」(M. 42—43) と公式化され、生産技術が詳しく論じられている。しかし、我々は先ず文明への途を歩むこの村の生産組織を通じて、村の構造を概観することからはじめよう。

土地制度について言えば、Benassis を援助する Grenoble 在住の Gravier 氏は村に 1000 アルパン (1836 年版以降は 400 アルパン) の農場をもち、これを四つの借地農場に分割し、夫々から年額 1000 フランの定額地代を吸収している不在地主である。Benassis 自身 500 アルパン (同 200 アルパン) の農場を所有し、Gravier 農場のフェルミエは開墾によって夫々 200 アルパン (同 100 アルパン) の自分の土地を獲得している。ところで、復古王政、七月王政の下では、大土地所有が展開するとともに、土地所有の零細化も進行した¹⁰⁾。J. PIOGEY の引用する資料によれば、1830 年頃の土地所有者戸数は 480 万戸に達し、そのうち 3.64 ヘクタールの可耕地をもつ戸数は 390 万戸であり¹¹⁾、10 ヘクタール以上の土地所有者は富裕な中農ないし富農であった。また、当時、地租査定単位当りの土地の平均面積は 4.5 ヘクタール、単位当りの賦課額は 14.4 フランであったから¹²⁾、今 1 アルパンを 42.20 アールとすれば¹³⁾、Gravier 農場のフェルミエでさえ約 270 フランの地租を納めていることになる。1831 年の選挙法改正は、選挙権有資格者の納税額を 200 フランに引下げ、これによって有権者数は 94,000 人

から188,000人に増加した¹⁴⁾ とはいえ、尚全人口の0.6%にも満たない数であった。従って「20人以上の使用人(農業労働者)を雇用する」(M. 44) Gravier 農場のフェルミエでさえ予期される以上に富裕な農村ブルジョアジーであり、彼らは資本主義的借地農業の経営者であると言えるであろう。一方、他の住民も「金を儲けるにつれて」土地を開墾し、「零細な耕地」を所有する「小地主」になっていくのであるが(M. 49)、ここで注目すべきは、BALZAC が *Le Curé de village* や *Les Paysans* におけるように分割地土地所有を非難するどころか、農民による零細土地所有を彼らの「富裕への途」として奨励さえしていることである¹⁵⁾。しかし、これら貧農層と大借地農とが対立した場合、前者の劣位は決定的であった。歴史的現実には、彼らにとって零細土地所有が「富裕への途」に通じるものではなく、逆に土地に執着することによって彼らが貧窮への途を辿ったことを教えている。BALZAC は「未墾地の存在」がこのような矛盾を解消するものと考えているのである。更に、Benassis の村では、これら零細土地所有農民の下層に、「一生の間他人のために嘴をふるい、土地を耕し、種をまき、作物を取り入れて働いてきた」(M. 94) Moreau 夫妻、「1 トワーズ 10 スーで溝を掘っている」(M. 88) 農民兵士 Gondrin らに代表される農村プロレタリアートが位置している。以上のように激しい貧富の差が存在し、零細農民の貧困が再生産される筈である村の現状を、BALZAC は次のように説明する。《Il existe dans la commune douze maisons riches, cent familles aisées, deux cents qui prospèrent. Le reste travaille》(M. 52)。つまり、BALZAC は彼にとって理想的状態である全住民のブルジョア化が、彼の提案する変革の手段によって可能である、と言うのである。

「産業」は手工業的熟練に基づく農村家内工業であり、この村の対外向産業である靴製造工業(雇用労働者40名)のみが小規模企業形態をとっているにすぎない。とはいえ、1848年において Paris の 64,816 の工場主のうち10名ないし10名以上の労働者を雇用していたものは僅か 7,117 にすぎなかったのである¹⁶⁾。更に留意すべきは、前述の近代的土地所有の下にある村の産業が、封建的土地所有に基づく一切の束縛から解放されていることである。それは商人資本の前貸問屋制からも自由である。煉瓦製造業 Vigneau から籠製造業者に至るすべての「産業者」が自らの採算によって自由に生産し、自ら製品の販路を求める「商品生産者」なのである。つまり、彼らは「生産者→商人」の経路を経て産業資本家へと上昇する

プロセスにある産業者として描かれていると言えよう¹⁷⁾。しかし、BALZACが見落した点は、マニュファクチャラーの未発展により、農村家内工業は必然的に零細土地所有へ復帰せざるを得なかったということである¹⁸⁾。また、これら産業者の下で働く職人や靴製造工場などで働く所謂工業プロレタリアートは一人として描かれていないのである。

以上が村の現状であるが、このような「繁栄への途」を村の住民たちに歩ませるために、Benassisが指導原理としたのは、人間の利己心を発揚させること、これであった。この指導原理は、「今日では、社会を支えるために我々は利己主義以外の支柱をもっていない。個人は己れのみを信じている」(M. 56)という、Benassis-Balzacの現実認識に基づいている。勿論彼はこのような時代を全面的に受け容れるというのではない。「現代の詭弁哲学」が社会の基礎とした個人的利害は、無制限な競争を生み出し、「個人を孤立させるばかりである」(M. 150)。これは「現代の病弊」(M. 56)である、と彼は言う。「野心と欲望と憎悪との絶えざる闘争においては」、個人が社会の「全般的な動きの犠牲者」になるか、その「共犯者」になるかのいずれかである(M. 201)。BALZACはBenassisを一度は共犯者とし、次いで犠牲者とすることによって、Benassis指導原理を裏づける事後的証拠とする。

「我々を目前に差迫った難船から救ってくれる偉大な人物なら、この個人主義を逆に利用して国民を起死回生させることであろう。しかし、この起死回生が行われるまでは、物質的利害と実利本位の時代である。実利本位、これこそ今日万人の合言葉である」(M. 59)。

この偉大な人物とは、回心によって、「行動的な祈り」(M. 237)の生活に入ったBenassis自身に他ならないのである。

さて、Benassisは自己の指導原理に立脚して村の改良事業を行った。彼がクレチン病患者を移すに際して、村会議員を味方につけることができたのは、「彼らの欲深さを刺激した」(M. 29)からであり、無知蒙昧な前村長を助役にし、共同事業者にするために、「この男の己惚れと利己心をかきたてた」(M. 39)のであった。このようなBenassisは《réaliste¹⁹⁾》、或いは《homéopathe²⁰⁾》と呼ばれる。しかし、ここに既にBenassis-Balzacのoptimismeが窺われないであろうか。つまり、利己主義に基礎を置く社会を病める社会と断じる態度と異って、利己心の発揚を文明への言わばpanacéeと考え、それに全幅の信頼を寄せる態度が見られるの

である。このことは Benassis の住民たちに対する態度に一層明らかである。無気力な住民たちに文明への途を歩ませるために、Benassis は先ず彼らのうちに新たな欲求をつくり出し、所有の観念を目覚めさせる。彼にとって、文明は欲望の充足を通してのみ発達するものだからである。住民たちがひとたび利己心をもつにいたると、Benassis が彼らに提唱するのは、《Allons, mes enfants, prospérez! Continuez à faire la fortune!》(M. 111) という合言葉である。ところが、彼のこの提唱はまさに「時代精神を要約している GUIZOT の提唱《Enrichissez-vous》」に呼応するものであった。住民たちも、当時の大ブルジョアジーと同様、この提唱にこたえる²¹⁾。彼らは Benassis の「忠告のどれ一つとして財産をもたらず源とならないものはなかったので、競って忠告どおりにした」(M. 44-45)。Benassis は「彼らに新しい販路を教えるのに一言いえば充分であった。あとは彼らの良識がうまくやっていった」(M. 45)。つまり、利己心を発揮させると経済は繁栄し、社会は調和的に発展すると言うのである。ここに現われているのは、「経済的合理主義に基づいて行動する巧利的な人間」に対する信頼の念以外の何ものでもない。

以上のことから、どのような「人間」が Benassis の村の基調をなしているか明らかであるが、ここでその「人間」を価値観の面から考えてみると、村の到る所で讃えられるのは、「鶴嘴を手にして死にたい」(M. 96) という農村プロレタリア、Moreau 老人にみられるように、労働の美德である。また、Benassis の誘致する産業の担い手は言うまでもなく、すべての住民が勤勉で、忍耐強く、向学心に富んでいる。村の「生きた歴史であり、新興商業国の歴史である」模範的な住民 Vigneau の一家にあっては、「すべてが収入と相応し、彼らの財産づくりの原理である秩序、節約、清潔がいつも維持されている」(M. 109)。つまり、Benassis が住民たちのうちに認める美德は、勤勉、儉約、忍耐心、向学心、清潔、秩序であるが、これらの美德は、BALZAC が他の箇所でもブルジョアジーのうちに讃えた美德であり²²⁾、或いはまた「貧乏人の美德」(M. 194-195) と呼ぶものに他ならない。しかも、Vigneau の例から、また「欲求—産業—利潤—安楽—有益な思想」という公準からも明らかなように、彼ら村の住民にあっては、利己心を発揮すること、即ち「富裕への途」がそのまま「徳性への途」に通じると考えられている。ところが、このような人間像こそは Adam SMITH の所謂「経済人」的人間なのであり、それは「中等なら

びに下層の階層」にのみ妥当するものであったのである²³⁾。彼らにあっては、「私益は即ち公益」であり、私的利益と公的利益との間に対立はない。従って、Benassis-Balzacは指導原理として個人主義の逆用を主張しながらも、実際の村造りでは、個人と社会との対立に目を塞ぎ、この対立を直視しなかった啓蒙主義の基盤に立っていると言わなければならない²⁴⁾。また、村に繁栄への物質的基礎をあたえるにあたって、彼は A. SMITH から J.-B. SAY へと継承された自由主義経済学の理論上の optimisme をそのまま踏襲しているのである²⁵⁾。 *Le Médecin de Campagne* の世界はまさに合理的利己主義のユートピアなのである。

しかし、資本主義的生産が生産関係の支配を確立するにつれて、個人と社会との緊張関係は不可避となる。Benassis の村もこの歴史的現実の埒外にあるものではない。というよりは、寧ろ BALZAC はユートピアの理論的物質的基礎を資本主義に求めたのであり、村の繁栄は必然的にユートピアの崩壊を準備する。村の住民は物質文明を代表する Paris の市民と異なるところがなくなるであろう²⁶⁾。

このような矛盾を回避するために、BALZAC は価値の序列のより高い人間行為を基盤とした社会を想定し、「忍耐心、向学心、勤労の愛」を「貧乏人の徳性」ないしブルジョアジーの美德と見做す階級的観点を離れ、問題を人間本性一般にかかわらせる。即ち「物質的生活の利害の不断の把握」(M. 74) が「徳性への途」と合致するのは、人間本性がより低い発展段階に在る場合であり、人間は更に進んで、「各種の社会的秩序を保持するのに役立つ根源的な諸原理に到達」(M. 76) しなければならない。この「諸原理」とは王国—monarchie—であり、宗教—catholicisme—である (M. 56)。さて、今や BALZAC が人間行為の原動力たるべき最高の美德として讃えるのは、honneur, altruisme, charité, amour などの《les anciennes valeurs féodales²⁷⁾》である。この段階に達した人間にとって— A. SMITH においては不労所得によって生活する特権階級にとって—利己心の発動は最早や「徳性への途」につながらず、逆に人間本性の墮落と結合している。これに対して、宗教は「人間の頹廢的な傾向に対する一つの完全な対抗組織」(M. 148) なのであり、人間をして「一切の個人的利害から脱却」(M. 57) せしめるのである。

宗教には「政治的必要性」と「道徳的効用」が認められる (M. 77)。それは来世という教義により諦めをもって「摂理の命に従うことが必要であ

る」と教え、従って「もろもろの社会の掟を裏づける唯一の権威」(M. 61)となる。一方、「キリスト教的美徳のなかでも最も美しいもの、即ち慈悲」は「無私無欲の献身²⁸⁾」を人間行為の原動力たらしめる。Benassisは為政者として、Genestasは軍人として「自己放棄」を象徴し、Genestasが村の到る所で出会い、かつ賛美するのは献身を体現した人々である。村では、住民全本が「友愛の精神」によって結合されており、その結果彼らは「唯一つの家族を形成しているかのようである」(M. 48)。この一大家族の家長 Benassis は彼らの guide, soutien, ange gardien であり、彼らの眼には《la vraie image du bon Dieu sur terre》(M. 124)と映るのである。住民とのこのような関係において、Benassisは《la plus douce des royautés, celle dont les titres sont écrits dans les cœurs des sujets, royauté vraie d'ailleurs》(M. 140)を表わしている、と BALZAC は言う。

以上のように、BALZACの理想的な王国は、経済的合理主義精神とキリスト教的社会の理念の基礎の上に築き上げられているのである。が、護教論的な立場に立つとはいえ、BALZACの関心は専ら法の遵奉、社会秩序の維持に向けられている²⁹⁾。つまり、「経済人」的人間を吸収し、調和的に発展する社会が想定されていると言えよう。BALZACは、このような社会が Benassis の如き自己放棄に徹した家父長的専制君主の下でのみ可能であると言うのである。ところが、この点こそルカーチが *Le Médecin de Campagne* をユートピア小説として否定する根拠としたところである³⁰⁾。従って、BALZACの理想的社会は二本の構造的支柱をもちながら、そのいずれの場合においてもユートピア的幻想でしかないのである。それでは、何故 BALZAC はこのようなユートピアを描かなければならなかったのであろうか。或いは彼のユートピアに見られる二面性を許容するものが BALZAC のうちに存在したのであろうか。この問題に関して、村の指導者たちが展開する政治論を通じて、BALZAC がどのような階級的立場にコミットしたかを考察しなければならない。

III

Le Médecin de Campagne における政治論に関しては、この作品の直前に書かれた *Du Gouvernement moderne* と比較検討しながら論を進め

よう。何故なら、B. GUYON が指摘して以来、*Le Médecin de Campagne* の政治論には *Du Gouvernement moderne* が多くの点でそのまま利用されているというのが通説のように思われるからである³¹⁾。さて、*Du Gouvernement moderne* は、BALZAC が王党派の立場から³²⁾、「立憲君主制を維持し、国家を繁栄に導き、王座と国民の名誉を一致させる一般的諸原理を考察」(G. 68) したものである。が、その政治論は本質的には民主主義の原理である選挙制度と議会制度に対する批判および絶対的権力の要請を立論の骨子としている。そしてこの点が *Le Médecin de Campagne* に最も多く利用されていることには異論がない。次いで、立憲政治の下で強力な権力を樹立するための政策が、「一国の永遠の基礎」である三つの階級、即ち「貧乏で無知な集団」(prolétariat)、「中流の集団」(bourgeoisie)、「貴族的な集団」(aristocratie)——この集団には現実の貴族階級、即ち財産、権力、才能による優越者を認めることが要請されている (G. 52) ——について検討される。このうち、プロレタリアートとブルジョアジーに関しては、BALZAC は前者には土地を所有させ、後者には自由をあたえ、政治に参加させることを主張するのであるが、このような進歩的な政策を掲げるにも拘らず、彼はここでは自由主義の精神から今までのうちで最も遠く隔っているのである。中産階級に認めるように提案する自由の意義について、BALZAC はまったく無関心である。それは単に中産階級を掌握するための手段と見做されているにすぎない。彼らの政治への参加についても同様である。BALZAC は中産階級にのみ選挙権を認める。が、それは「選挙の原理を腐敗させる」ことを前提としたものであり、「選挙の原理を相手に闘う」政府は、BALZAC にとって、《aveugles》か《niais》でしかない (G. 60)。彼は、プロレタリアートは言うまでもなく (G. 54)、ブルジョアジーをさえ、革命の原動力となる危険な階級、籠絡するためには多くの譲歩も止むを得ない階級としか考えていないのである (G. 57-58)。

それでは、*Le Médecin de Campagne* において、これら三つの社会階級に対して、BALZAC はどのような態度を示しているのであろうか。先ず王権について言えば、この作品の執筆時において、BALZAC が légitimiste を自認していたことは言うまでもない³³⁾。が、作品における BALZAC の態度は、*Du Gouvernement moderne* におけるほど明確ではない。そこでは、「たとえ不条理に思われようとも」、légitimité は所有権と正当な不

平等の保証として擁護しなければならない、と BALZAC は主張しているのであるが (G. 68), B. GUYON が指摘しているように、*Le Médecin de Campagne* には、*légitimité* という語が一度も現われない。このことから、B. GUYON は、BALZAC がこの作品において、強力な権力であるならその起源の如何を問わず擁護するという、彼の最も心奥の、最も独自の政治思想にもどっている、と結論している³⁴⁾。とはいえ、BALZAC が王制に対してまったく無関心であったとは言えないであろう。彼が、

「現代の自由主義が無謀にもブルボン王家の栄える治世に戦いを挑むために援用している思想が勝利するようなことがあれば、それはフランスのみならず、自由主義者自身の破滅となるであろう」(M. 151)

と言う時、BALZAC は王制を間接的に擁護していると言えるのである。

このことは、貴族階級に対する BALZAC の態度についても確められるであろう。*Du Gouvernement moderne* においては、貴族院の果すべき役割として、第一に「指導的な内閣」となること、第二に「選挙人と国王との間の障壁」となること、第三に立憲政治に適った法律を制定することが挙げられていた (G. 65-67)。しかし、*Le Médecin de Campagne* では、二院制が考えられているようであるにも拘らず、貴族院については何ら明言されていない³⁵⁾。唯、BALZAC は Benassis に次のように語らせるのである。

「……政府が最も強力に組織され、従って最も完全な政府となるのは、より限定された特権を擁護するために打ち樹てられた時に限られる。ここで私が《特権》と呼ぶものは、嘗って万人を犠牲にして、不当にも或る種の人々にあたえられた権利ではない。そうではなく、もっと狭い意味で、権力の移動がその中だけに局限され、外部に渡らないような社会的階層を言うのである」(M. 152)。

この社会的階層を *Du Gouvernement moderne* に求めるならば Pairie であり、*Le Curé de village* ではイギリスの貴族階級である。権力の掌握とは「指導的な内閣」のことを言うのであろう。何故 BALZAC がこのような曖昧な表現をしなければならなかったかは暫く措くとして、BALZAC は次のような論法で貴族階級を擁護するのである。

「フランスに百人の大貴族がいるとしよう。彼らは百の摩擦しか起きないであろう。ところが、貴族階級を廃止すれば、すべての金持が特権階級になる。百の摩擦を生じ、社会的不平等の傷を広げてしまうことに

なるだろう。……摩擦を増すことによって、闘争を狭い階層に限定する代りに、社会体のあらゆる部分に拡大する。攻撃と抵抗が全般的になれば、一国の滅亡は時間の問題である」(M. 152-153)。

立法権に関しては、法律は、社会契約が「もたざる者に対抗してもてる者同志が結ぶ永遠の契約」(M. 155)であるという原則に従って、「法律が利益をもたらす人々によって作られるべきである」と述べられている。が、この場合法律から直接利益をうける人々とは貴族階級ではなく、「財産、思想、権力において優越している者」(M. 155)である。*Du Gouvernement moderne* では、彼らを「現実の貴族階級」と認めることが要求された。しかし、ここでは BALZAC はこれらの優越者を「明白な事実」としうけ入れるように要請するにとどまり、貴族階級と結びつけることを避けているのである。以上のような貴族階級に対する BALZAC の態度の変化もまた B. GUYON の仮説によって説明され得るのであろうか。

「貧乏で無知な階級」について。*Du Gouvernemet moderne* における階級対策のうち、*Le Médecin de Campagne* はこの階級について最も多く利用している。しかし、この階級に対する態度の変化も顕徴である。*Du Gouvernement moderne* では、この階級は殆んど常に《la classe pauvre et ignorante》と呼ばれるのに対して、*Le Médecin de Campagne* では、《la masse souffrante》(M. 152)、《la classe pauvre et souffrante》(M. 154)、《la classe ignorante et souffrante》(M. 157)と、souffrante なる形容詞をつけて呼ばれる。つまり、BALZAC は民衆が「忍耐と諦めをもって崇高にも勤労の道を歩んでいる」姿に感嘆し(M. 154)、彼らに対する共感を示そうとしたのである。

この階級の政治参加についての見解の推移は最も注目すべき点であろう。*Du Gouvernement moderne* では、この階級に対しては、政治的権力に参加する資格も、従ってまた選挙権も認めるべきではない、と BALZAC は極め付けていた。

「民衆から受託者を出させるべきではないし、民衆に法律の批准を求めるべきではない」(G. 57)。

これに対して、*Le Médecin de Campagne* では次のように述べられる。

「民衆が彼らに代って税金を承認したり拒絶したりする受託者をもつこと、これならば正当なことであり、最も残忍な圧制者の下でも、最も好人物の君主の下でも、いつでも存在したことである」(M. 158)。

この受託者が衆議院を構成すると考えられる。*Le Médecin de Campagne* で問題にされている議会 (les assemblées) は、*Du Gouvernement moderne* の衆議院と同様に立法権をもたず、専ら「租税問題と法律の記録にかかわるもの」(M. 159) だからである。しかし、この受託者がプロレタリアートの間から選ばれるのか、或いはブルジョアジーの間から選ばれるのかは明確ではない。何故なら、BALZAC は「選挙権を大幅に制限すること」を主張し、普通選挙制に反対しており、従って当然民衆には選挙権がないと考えられるからである。それでは、何故このような矛盾が生じたのであろうか。

ところで、BALZAC における絶対的権力の要請は、政治的正義と個人的正義の峻別に基づいていた³⁶⁾。が、しかし、*Le Médecin de Campagne* では、為政者における正義が強調され、虐げられた民衆の革命に対する同情が示されている (M. 94)。勿論 BALZAC は民衆の革命を支持すると言うのではない。が、BALZAC 自身、*Du Gouvernement moderne* において、民衆の掌握という目的のみを目指し、そのために用いる手段の道徳的な価値にも、民衆の「塗炭の苦しみ」(M. 94) にも、一切無関心であったのである。*Le Médecin de Campagne* でも、彼は絶対的権力を要請する。しかし、そのために、彼は様々な配慮を加えざるを得なかったのである³⁷⁾。les pauvres に対する BALZAC のこのような態度は、村の司祭 Janvier 師の言葉や《La Fosseuse》の挿話におけるような、les riches に対する痛烈な非難となって現われるのであるが (M. 146, 127)、Benassis の次の言葉に見られるように、その批判はサン・シモン主義的な主張となり、les riches の存在そのものに向けられている。

「遊んで暮している者の生活だけが金のかかる生活であり、何も生産しないで消費することは社会的な窃盗であるとさえ言えるであろう」
(M. 97)。

しかしながら、この階級に対する BALZAC の態度は一貫して sympathique であるわけではない。*Le Médecin de Campagne* においても、*Du Gouvernement moderne* におけるように、プロレタリアートには《un bonheur tout fait》があればよい、と BALZAC は言うのである (M. 155. G. 54)。「プロレタリアートは国家の未成年のようなもので、常に後見を受けなければならない」(M. 154) のであり、また、たとえ革命を起すに至る程虐げられていても、なお社会秩序を維持し、忍従することが真に偉

大なことである、というのがBALZACの真意なのである(M. 101)。一方、彼は金銭を「もろもろの能力を表わすもの」と考え(M. 97), les richesを擁護する立場に立つ。

「金持の閑暇は儉約で勤勉な生活を送った報酬である」(M. 143)。それにも拘らず、民衆は「どんなに正当に獲得された権利でも特権と見做す…」(M. 155)。就中、民衆が特権視するのは、「働かないで暮す権利」であり、

「彼らの目には、生産せずに消費する者は搾取者に見えるのである。

民衆は目に見える労働だけを要求し、彼らを最も富ませる知的生産など眼中に置かない」(M. 152-153)。

1830年の*Les Artistes*において、芸術家を不当に遇するブルジョア社会に向けられていた批判は、ここでは芸術作品を理解しない民衆に対する不満となって現われているのである³⁸⁾。以上によって、この階級に対するBALZACの態度の二面性は明らかであろう。彼は民衆擁護の態度を示そうとするのであるが、どのようにしても民衆を信頼できず、プロレタリアート蔑視が現われるのを避け得ないのである。このような二面性がこの作品の内的なhomogénéitéを破壊し、或る種の異和感をあたえるのではないだろうか。

「中産階級」について。*Du Gouvernement moderne*においては、「特権を忌み嫌い」(G. 59), 「平等を渴望している」(G. 63) 中産階級を掌握するための政策が詳細に展開されているのに対して、*Le Médecin de Campagne*では、それらの一切の主張について、BALZACはまったく沈黙していることに、先ず注目しなければならない。*Le Médecin de Campagne*においても、中産階級について言及されてはいる。が、それは*Du Gouvernement moderne*とは異った観点からの、別の方法によるものである。このことから、*Le Médecin de Campagne*における政治論の既に指摘したような矛盾が生じたのである。即ち、選挙権は「財産とか権力とか知性とかをもつものによって行使されるべきこと」(M. 156)が主張されているにも拘らず、一方では民衆が「租税問題と法律の記録」のみを権限とする議会、「選挙によるこの機関」(M. 158)をもつことが認められているのは、中産階級に対する政策について沈黙したBALZACが議会を構成する階級を、ブルジョアジーからプロレタリアートへと移さざるを得なかったことから生じたものである。

それでは、何故 BALZAC は *Du Gouvernement moderne* における明解な階級分析を放棄してしまったのであろうか。そこでの中産階級に関する政策を彼がまったく取り上げなかったのは何故であろうか。この *réticence* の原因は、我々の推論では、BALZAC が自らの拠って立つ階級的基盤を中産階級に求めたことに在る。彼は Benassis に「私はブルジョアジー出身です」(M. 62) と明言させているのである。このことから、*Le Médecin de Campagne* における BALZAC の各社会階級に対する態度が理解できよう。彼の立論において、王制と貴族階級の擁護は大前提である。また、彼にとって、財産、能力、権力における不平等は「認めざるを得ない事実」であり、これら三分野における優越者こそ現実の貴族たるべきであった。しかし、この作品の執筆時において、ブルジョアジーは貴族階級の特権を打破したばかりであり、今や中産階級の立場を標榜する BALZAC は、貴族階級の弁護論を積極的に展開し得なかったであろう。また、「特権を忌み嫌い」「平等を渴望している」中産階級に対して、彼の言う優越者を貴族として承認することを要求し得なかったであろう。かくして、「特権を忌み嫌っている」のは、中産階級ではなく、民衆即ちプロレタリアートなのである。

貴族階級の擁護を立論の背後に退け、中産階級の立場を公言した BALZAC にとって、ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の階級抗争が最大の問題となる。民衆にとって「ブルジョアジーは敵なのです。この闘争が私の興味をそそりました」(M. 62) と Benassis は言う。この闘争を回避することは焦眉の急である。就中、民衆に勝利させるべきではない。「苦しむ大衆の勝利は常に一時的なものであり、最大の混乱を伴い」(M. 152)、必然的に社会の、ひいては国家の破滅をもたらすからである。この破滅を逸れるためには、強力な権力によって支配され、能力の不平等のみに基づく強力な階級性をもった社会組織の樹立が必要であることを、ブルジョアジーは認識しなければならない。にも拘らず、彼らは率先して自由と平等を要求し、ブルボン王家に戦いを挑んでいる。

「もし、万が一、ブルジョアジーが反対派の旗の下に結集し、彼らの虚栄心にとって我慢のならない社会的優越を打ち倒すようなことがあれば、その勝利のすぐ後でブルジョアジーは民衆に対して闘争を行うことになるであろう。民衆はやがてブルジョアジーのうち一種の貴族をみるであろうから」(M. 152)。

この闘争において、民衆の側の勝利は不可避である、と BALZAC は考える。「金持は常に貧乏人より少ない」(M.153) からである。その結果、ブルジョアジーは民衆によって「法律上の特権を奪われ、欺かれ、盗まれる」(M.44) であろう。ここに至って、BALZAC の志向するところは明らかである。彼は、ブルジョアジーに向って、民衆と共同して王制を、貴族階級の特権を打倒しないように呼びかけているのである。

七月革命は、金融貴族と呼ばれる上層ブルジョアジーの支配を確立したにすぎず、革命が民衆にもたらしたものは、穀物価格の高騰と失業の蔓延であった。民衆のうけた心理的な打撃は、彼らが「新しい時代の到来によって、運命が改善されるだろうという大きな期待を抱いていただけに一層痛ましいものであった³⁹⁾。」1831年11月の Lyon における canuts 暴動に代表される如き、賃上げを要求する労働者の暴動は殆んど到る所で起ったと言われ³⁹⁾、共和主義的ブルジョアジーの反政府運動も激しさを加えていた。*Le Médecin de Campagne* はこのような社会の動きを見た上で書かれたのである。が、知られるように、二月革命においても、労働者階級とブルジョアジーは同じ陣営にいたのである。ブルジョアジーとプロレタリアートとの対立は、二月革命以後、特に六月反乱によって表面化する。従って、BALZAC は六月反乱の不可避性を予測していると言えよう。そして彼が貴族階級との妥協、普通選挙制の否定、君主制の擁護を主張する時、BALZAC はブルジョアジーに向って、まさしく六月反乱以降に彼らが辿ることになる道を、前もって指し示しているのである。

他方、BALZAC によれば、ブルジョアジーと民衆とは協調しなければならず、また協調することは可能である。どのようにして可能であるのか。宗教によって。嘗って宗教心が旺盛していた時代には、両者の間には今日見られるような敵対関係はなかったのである。

「昔は今日以上に、諸国民の間に、民衆の無視された権利や苦しみに対して、高邁にも母親のような気持を抱く人々がいたものである。それ故、中産階級の申し子たる聖職者も物質的な力に対抗し、民衆を彼らの敵から護ってやったものである」(M.150)。

しかし、現代ではブルジョアジーは民衆ほどにも信仰心をもっていない。彼らの《philosophisme》は民衆に「致命的な手本」(M.146)を提供し、それから結果した宗教心の衰退が、階級的対立を激化させ、社会秩序を崩壊させたのである。確固たる政治体制を確立し、社会秩序を回復しなければ

ばならない。そのためには、「金持を貧乏人の友とし、貧乏人に完全な諦めを命じる確固たる宗教が必要がある」(M. 159)。キリスト教こそは「その社会保存の教義をあらゆる階級に侵透させ、再び社会秩序を打ち樹て」(M. 146)てくれるであろう。就中、「中産階級の人々の心に宗教心を蘇らせる」(M. 146)ことが重要である。信仰心も道徳も社会の上層階級から下層におよぶべきものだからである。

以上のように、*Du Gouvernement moderne* において正統王朝派の立場から、貴族階級と中産階級との間の階級的妥協が必要であると主張した(G. 54) BALZAC は、ここでは中産階級とプロレタリアートとの妥協が、前者のイニシアチヴの下に可能であると説くのである。BALZAC が正統王朝派を自認しながらも、立脚すべき階級的基盤をブルジョアジーに求めたこと、これが *Le Médecin de Campagne* における所謂 BALZAC の「独自の政治論」の理論的性格を規定し、同時に彼の描くユートピア的世界像を支える基盤になっているのである。

IV

Lettres sur Paris が如実に示しているように、「栄光の三日間」に続いたのは、《le temps des désillusions》であり、《le temps des anticipations⁴⁰⁾》であった。七月革命に向って、自由主義陣営の諸勢力の間に結ばれていた同盟は勝利と共に破棄され、階級抗争は新しい段階に入ったのである。今これを Balzac 自身の分析に基いて概観してみると、七月王政下に政権の座についた「国民党」(立憲党)は、中小資本家の政治権力への参加を認めようとする LA FAYETTE, LAFFITTE らの《Parti du Mouvement》と、金融貴族の利益代弁者 GUIZOT, Casimir PÉRIER らの《Parti de la Résistance》との二派に分裂し、政権は両派の間で「羽根のように突き交わされていた。」反政府派としては、正統王朝派、帝政派、「産業者たち」の急進派などがあり⁴¹⁾、最も勢力をもってくるのは急進派である。BALZAC がこれを一括して「産業者たち」の党派と呼んでいるのは SAINT-SIMONIENS の影響によるのであろうが、この党派の構成は実際にはより複雑であった。先ず、《National》紙に拠るブルジョア共和主義者たちの反政府派、「民主主義の貴族⁴²⁾」。次いで《Tribune》紙に拠る小ブルジョアジー、1793年の「山岳党」に当る民主主義的共和主義者

たち。この小ブルジョアジーの共和派には、SAINT-SIMONIENS などの所謂社会主義者たちも属していた。最後に、中流の商・工・知識ブルジョアジーで構成されていた共和党が、プロレタリアートと結びつき、共産主義の流れを形成していく。これら諸階級間において、フランス産業資本は、一方では大ブルジョアジー間の、他方ではプロレタリアートとの闘争を進めながら、彼らの支配体制を確立していくのであるが、その際彼らはフランス社会主義に共通するブルジョア的側面を展開することのうちに、彼らの理論的行動的支柱を見出したのであった。

しかしながら、これら諸階級のせめぎ合いの渦中において、あらゆる社会階層が、様々な統一原理の下に、「社会的混乱を克服するに足る強力な諸制度の樹立」を目指していたのである。《unification des volontés》への志向は《le temps des anticipations》の一般的特色でもあったと言えよう⁴³⁾。その場合、夫々の統一のプログラムには二つの共通した要素が認められる。その一つは、BONALD らの Ultras から CABET らの Communistes に至る殆んどすべての党派の代弁者が、なんらかの形でキリスト教による《unification des volontés》を期待したことである。が、そのためにはキリスト教は蘇生しなければならなかった。七月革命によって正統王朝が倒されると、これと提携していたキリスト教会の死亡診断書があらゆる方向から提出されていたからである⁴⁴⁾。正統王朝と共に死すべきか、或いはこれと手を切り、「自由」と共に再生すべきか、《catholiques français》は選択を迫られていた。《Avenir》紙に拠る LAMENNAIS や MONTALEMBERT が選んだのは後者の道であった⁴⁵⁾。一方、Taibout 街では、SAINT-SIMONIENS が日曜毎に「教義の解明」を行い⁴⁶⁾、「普遍調和」のための「新しいキリスト教」、《un nouveau lien d'affection⁴⁷⁾》を説き、彼らの機関紙《Globe》は、BONALD や MONTLOSIER の《les doctrines de l'ancien régime》から LAMENNAIS らの《le catholicisme rajeuni》に至るあらゆる党派の教義に挑戦していた⁴⁸⁾。《Le Médecin de Campagne》において、BALZAC が「新しい宗教」の必要性を力説していることは既にみたところである。が、彼は「新キリスト教」としての「サン・シモン教」には批判的だったのであり⁴⁹⁾、《Le Médecin de Campagne》の村の司祭、Janvier 師が展開する理論には《Avenir》紙の影響が⁵⁰⁾、Benassis のそれには BONALD の理論との類似が指摘されるのである⁵¹⁾。しかし、重要なことは、内容の類似ではなく構造の一致である。

共通する他の一つの要素は、七月革命の先頭に立って勝利を収めた《peuple》、自らを《la partie principale de la société⁵²⁾》と自覚した労働者階級に対して、他のすべての階級が態度決定を迫られていたことである。《Journal des Débats》紙は、GUIZOT. THIERS らが寄稿し⁵³⁾、BALZAC が1831年の総選挙に立候補する時その支持を求めた新聞であるが⁵⁴⁾、12月8日付の同紙は次のように書いている。

「中産階級は、事態がどのようなになっているかをはっきりと知らなければならぬ。中産階級は人にだまされたり、或はまた、人にたいして残虐や非道であったりしてはならない。ここでいうところの人にだまされるとは、……プロレタリアの波が政府やわが国の地方自治機関や国是に関するすべてのもののなかにおしよせていく場合のことである⁵⁵⁾。」BALZAC の中産階級、プロレタリアートに対する態度との類似は明らかであろう。1830年7月30日付の《National》——ブルジョア共和主義者たちの機関紙——は、

「三日前からすべてのことをなしとげたのは人民である。人民は力強く、しかも崇高な存在である。勝利を手におさめたのは人民なのだ。闘争のすべての結果は彼らに帰さねばならぬであろう」
 ということを確認しながらも、「勇敢な労働者」に対して職場に復帰するようにと勧告していた⁵⁶⁾。しかし同時に、同紙は《peuple》という語が当時もっていた特殊な意味——ouvriers とか prolétaires とか pauvres とか呼ばれるものの全体を表わした——に反対し、

「パリの労働者人口が人民の全体ではない。彼らは芸術家や商人と同様人民の一部にすぎない⁵⁷⁾」

と主張することによって、《souveraineté du peuple》のドグマから解放されようとしていたのである。これに対して、SAINT-SIMONIENS にとっては「人民は即ち神⁵⁸⁾」であり、《Globe》紙は「最も貧困な最大多数の階級」を解放し得るのは、彼らだけであると主張していた⁵⁹⁾。しかし、彼らは「産業者」ないし「勤労者」なる階級のうちに労働者から企業家、銀行家までも包含することによって階級対立を解消しようとしたのであり、彼らの理想とする「平和的な普遍的協同社会⁶⁰⁾」へと向う人類の進歩は聖職者（芸術家）、学者、産業者（銀行家、企業家）の指導によって推進されるものであった。要するに、SAINT-SIMONIENS にとって労働者の心理は無縁のものであり⁶¹⁾、彼らは civilisateurs として労働者に臨み、

これを言わば上から解放しようとしたのであった。

以上のような政治・社会情勢の下において、《peuple》は、文学者にとってもまた無視し得ない存在となり、彼らにも態度決定を迫っていたのである。その場合、彼らの多くが選んだのは、SAINT-SIMONIENSが指し示した道であり、彼らは「人類の指導者」としての *fonction* を自覚し、「民衆の *civilisateurs*」となり、LAMARTINE. HUGOらがユートピアを指し示す詩人の使命をうたった⁶²⁾。BALZAC自身、*Du Gouvernement moderne*において、「貧乏で無知な階級」に対する政策を論じる時、ユートピストについて次のように述べている。

「博愛、知識の普及、人類、道徳、進歩、文明等々を云々する連中がいるが、そのような連中は、自分の利益のために国家を破滅させかねない極悪非道の徒であるか、或いは善意の使徒であるかのいずれかである。もし彼らが善意の人であれば、自らの手で貧乏人の傷を癒し、産業を試み、貧乏人に儉約を教え、救済しようとする筈である。彼らは自分の仕事に倦むか、あくまで仕事を遂行しようとするかのどちらかである。が、いずれの場合にしろ、彼らの熱意も思想もなんら危険なものではないのである」(G. 54-55)。

Benassisはまさしくこの「善意の使徒」の一人である。構想されつつあった *Le Médecin de Campagne* がこの文を書かせたのか、或いはこれが Benassis という人物を創造させる一契機となったのかは不明である。が、少なくともBALZACは、HUGOやLAMARTINEにさきがけて、「ユートピアのひと」Benassisが「貧乏で無知な階級」の運命を改善していく姿を描くことによって、「芸術家としての使命」を實踐しようとしたと言えよう。

以上のような歴史的背景の下で、BALZACがブルジョアジーの立場を公言し、民衆への共感を示さざるを得なかったことが、そのユートピアの性格を規定しているのであるが、更にその理由として、BALZACが *Le Médecin de Campagne* を選挙綱領として利用する意図をもっていたことを見逃すことができない。さて、1832年9月23日、BALZACは「今度の選挙には Angoulême で立候補する」決意を表明した。そして選挙綱領として、*Le Médecin de Campagne* の宣伝を依頼した相手は、「熱烈な共和主義者」、François-Michel CARRAUDの妻、Zulma CARRAUDであった。ところで、Zulma CARRAUDはBALZACの「良心」をもって任

じ、BALZACの使命が作家として後世に名を残すことにある、と絶えず説き聞かせた真実の友の一人であった。それ故彼女は、BALZACが政治に身を投じることには、それが彼の名声を汚すものと考え、夙に反対したのであった⁶³⁾。CARRAUD夫人の非難はBALZACが正統王朝派に加ったことに対して、一層痛烈であった。彼女にとって、BALZACが最早や少数派でしかない王党派に加わるのは、党の領袖FITZ-JAMES公爵の姪、CASTRIES公爵夫人を「代償」として、BALZACが「党に買収され」たためであるか、或いは彼の方で「出世のために盲目の党を利用」しようとしているように思われたのである(C. 77-78)。ZULMAがBALZACに望むのは、政治の分野においてもまた彼の独立独歩であった。BALZACがどのような政治色をももたず、自己の信念を明確に表明し、自らの才能のみを頼みとすることであった。

「政治のこと、経済のことをお書きになって下さい。たとえ誰れであろうとも、人の後楯を受けずにお書きになって下さい。そうなれば、あなたはきっと成功なさるでしょう」(C. 77)。

BALZACが選挙運動の直接の支えにしようとしたZULMAの、彼の政治的言動に対する非難、独自性への励ましは、BALZACに少なからぬ影響を及ぼしたに違いない。B. GUYONは、ここに、この作品においてBALZACが彼独自の政治社会思想を表明するに至った一つの契機を見ている⁶⁴⁾。

しかし、ZULMAはBALZACに*légitimiste*として立候補することを断念させようとしたのではない。自分の政治思想が多くの点で彼女の思想に近いのだと言うBALZACに対して(C. 72-73)、二人の間には「何一つ共通の考えはなく」(C. 69)、彼の無道徳性は絶対に容認できないと抗弁しながらも、彼女は*légitimiste*としてのBALZACを受け容れ、彼に選挙への期待を抱かせたのである。

「当地では、正統王朝派の中で、あなたが殆んど全部の票を獲得なさるだろう、とベルジュスさんは申しています」(C. 78)。「この町には、心底シャルル十世党であるクラブがあります。あなたはこのクラブを当にすることがおできになるでしょうし、このクラブにとっても、選挙の際には、あなたが希望の光となることでしょう」(C. 84)。

まことに、彼女にはBALZACを「信じる必要」(C. 79)があったのである。

とはいえ、CARRAUD 夫人が BALZAC に対して最も激しく非難した、もう一つの点に注目しなければならない。それは BALZAC の民衆観に向けられた批判である。BALZAC が「私はすべての集団から尊敬されるよりも、……〔選ばれた〕数人の人々から尊敬されることを熱望しています。その上私は集団に対して深い軽蔑を抱いているのです」(C. 52) と書き送ったのに対して、ZULMA は、万人の幸福をユートピア扱いにするに至った BALZAC の境遇に同情の念を示しながらも、彼の心理を次のように見抜いている。

「あなたは特権を好まれます。優れた精神の持主たちにあたえられた特権を、あなたがおもちになっているからです。自分のうちに何か優れたものを感じ、広大で偉大な人生を解しながらも、偏見や身分柄や不当な軽蔑によって無気力になっている人の惨めさを、あなたはお忘れになったか、おそらくは決しておわかりにならなかったのでしょうか。……私は金持によってずい分と中傷され、搾取されている貧困階級の人々のもっている精神的欲求をずっとよく存じています」(C. 56)。

返書の中で、BALZAC はこの非難に一言も触れていないが、CARRAUD 夫人は追求の手を弛めなかった。

「唯一つの階級、……実際様々なニュアンスをもっていますが、極く限られた物質的世界で行動し、決して社会全体に広がることのなかった階級の賞讃をお求めにならなければなりません。その賞讃によって、他の一切を無視し、軽蔑なさるのでなくてはなりません。あなたは二十人の知性のためにしかお書きにならないとか！ でも、あなたはお書きになったものを二十部しか印刷されないことなどありません！ 何よりも首尾一貫して下さいませ。流行遅れの服を着た人のうちに偏狭な人物しか見ず、労働者のうちに機械しか見ず、手に胼胝をつくっている人夫のうちに重罪裁判所の獲物しか見ない人が、『天使は白い』ことを理解するだけの雅量をもちたいなどと、どうしてお望みになるのでしょうか。自分の分野以外で活動している一切のものの中に、不完全で欠陥だらけの組織をもち、思考の得も言えぬ楽しみから締め出された者しか見ない人、家具を型どり、婦人服を裁断し、帽子の反りを型どっている人々が大金持の買手と同じ気高い思想の持主であることを信じない人、そのような人に、過ぎ去った諸世紀の大洋の探検へと言の葉に乗って船出することの意味が、一体理解できるのでしょうか」(C. 67-68)。

そして、彼女は自分が庶民であることを、「貴族化してはいるが、圧制に苦しむものに常に同情の念を抱いている庶民である」ことを繰り返して明言しているのである (C. 69)。ところで、BALZAC の民衆観は *Traité de la vie élégante* (1830年) に明瞭に示されていた。即ち BALZAC にとって、プロレタリアートは《l'homme-instrument》であり、「人間道具は言わば社会的零」であり、「社会の最下層に置かれている人間が自分の運命を神に向かって抗議する権利のないのは、まさに蠣にその権利がないのと同じである⁶⁵⁾」と言うのであった。CARRAUD 夫人がこのような BALZAC の主張に反駁していること明らかであろう。さて、この痛烈な批判に対して、BALZAC はいつでも「芸術家の屋根裏部屋」に戻る決心はついていると答えたものの (C. 75)、肝心の民衆については一言も触れていない。CARRAUD 夫人が納得しなかったのは言うまでもない。

「このことにつきましては、もうこれ以上あなたとお話したくありません。……民衆と意見を交わされず、彼らを芸術家の目でごらんになるのでしたら、あなたには彼らの欲求を判断することはおできになりません。そのことをあなたはわかろうとなさらないのです」(C. 77)。

彼女は BALZAC が *légitimiste* として立候補することは受け容れる。が、民衆との関連において、BALZAC に次のように勧告するのである。

「選挙人には道徳的保証が、誰れにでもわかる本が必要です。それをおあたえになれば、多くの選挙区があなた一人のものになります。……間違っているにしましても、正しいにしましても、王党派は大衆から軽蔑されています。けれども、何をするにしましても、兎のシチュエーションを作るには兎が要するという至極ありふれた原則どおり、大衆なしには政治はあり得ないのです」(C. 77-78)。

CARRAUD 夫人のこのような言葉が、*Le Médecin de Campagne* の世界像の形成に、その政治論に反映しなかったのであろうか。勿論この作品に見られる BALZAC の民衆に対する態度がすべて借り物であると言うのではない。彼は後に *La Messe de l'athée* (1836) におけるように《le dévouement du peuple》に心からの共感を示し得るであろうし、*Le Curé de village* におけるようにその力の偉大さを十分認識し得るであろう。しかし、*Traité de la vie élégante*、就中 *Du Gouvernement moderne* から *Le Médecin de Cmapagagne* へと、BALZAC が民衆に対する態度を変えざるを得なかった一因として、CARRAUD 夫人による民衆の擁護があったこと

は明らかであろう。また、彼が専制君主を理想化した背後にも、「権力を憎む」(C. 69) CARRAUD 夫人が見られるであろう。この作品の読者としては《la portière》から《la grande dame》までの広い層が想定されていた⁶⁶⁾。とはいえ、BALZAC が具体的に思い描いた読者のイメージは CARRAUD 夫人の姿と結びついていたであろう。作品を着想すると直ちに BALZAC は彼女に《… un livre selon votre cœur, *Le Médecin de Campagne*》(C. 72) と書き送ったのである。BALZAC は、この作品によって、「選挙人に対する道徳的保証」をあたえようとしたのであるが、それは同時に CARRAUD 夫人の代表する社会階層に対する「道徳的保証」でもあった。そのために、BALZAC はまさしく CARRAUD 夫人の言う「貴族化した庶民」の立場をとるに至ったと言えよう。しかしまた、BALZAC は彼女の言う「芸術家として」民衆を見る目を捨てたのではなかった。légitimiste としての立場を捨てたのでもない。正統王朝派と BALZAC との間には友好的な関係が保たれていた⁶⁷⁾。彼らと CARRAUD 夫人の属する社会階層との和解、BALZAC はこの和解を彼女と自分との間に見出すことができたのである。*Le Médecin de Campagne* の世界は、これらの諸関係をこそ如実に反映していると言えないだろうか。そうとすれば、BALZAC の「貴族化した庶民」の立場とは、どのような現実の社会集団の立場であったのだろうか。これを決定するために、我々は再び *Le Médecin de Campagne* の世界に戻らなければならない。

V

BALZAC の作品の基調をなす「人間」は、「個人的人間」および「社会的人間」として捉えられていると言えるだろう。「個人的人間」にとって、自らのエネルギーの全的な発動が可能でなければならず、それを制約する一切の障害に、「個人」は挑戦する。そこから個人の内部における、個人間における、個人と社会における闘争が、更には社会的集団間における闘争が生じる。これらの闘争における勝利者は絶対的権力者となり、彼自らが掟となる。しかし同時に、BALZAC は、HOBBS のように、「個人の野望と欲求が社会状態の脆弱な境界を衝き破らないように苦慮し⁶⁸⁾」、絶対的服従を唱える。Benassis-Balzac が家族を社会の基礎と考えるのは、「少くともそこにおいて服従がまなばれる」からである(M. 77)。人間は社会的存在として社会秩序を維持し、社会の掟に従わなければならない。

BALZAC が《L'avenir c'est l'homme social》(M. 56) と言う時、彼の心には彼の作品の基調をなすところの、人間形成に及ぼす社会的作用よりも、BONALD の言う「社会のためにのみ存在する⁶⁹⁾」人間があったのであろう。Benassis のみならず、*Le Médecin de Campagne* のすべての人物が、Benassis によって創造された社会における「社会的人間」であると言えるのである。

しかしながら、絶対的支配を求めるとはいえ、BALZAC はそれによって個人の自由な飛翔が圧迫されることに強力に反対する。絶対的支配と圧制とは異なるのである。立憲君主制の下で絶対的権力を樹立するための統治の原理を論じた *Du Gouvernement moderne* を、BALZAC は次のように結んでいる。

「この統治の公式においては、『各人にはその仕事に応じて』という現代社会の念願が、社会の最下層部にまで侵透している法則であり、しかもヒエラルキーは、専ら選挙に基づく統治におけるように不安定なものではなく、固定しているのである。唯それは現実的で正当な野心の流れには容易に突き破られる。もろもろのカテゴリーは乗り越え難い障壁ではなく、すべての挑戦者に開かれている闘技場である」(G. 68-69)。つまり、政治は統一と階級性を要求するが、同時に「現実的で正当な野心」には無限の上昇運動を可能ならしめなければならないのである⁷⁰⁾。

ところで、*Du Gouvernement moderne* の結語における《à chacun selon son œuvre》という言葉が、SAINT-SIMONIENS の有名な標語、《à chacun suivant sa capacité, à chaque capacité suivant ses œuvres》(*Doctrine*. 94) の variation であることは DONNARD の指摘を俟つまでもないであろう。SAINT-SIMONIENS が理想とした産業社会なるものは、その頂点に位置する銀行家および企業家によって「一般銀行制度」を通じて強力に統制されたところの、「産業的平等」——能力の不平等——に基づく階層的社会であり、上述の公式的命題は「産業的平等」の主張の論理的帰結であった。しかし同時に、「産業的平等」の主張は、「門閥貴族の諸特権に対するブルジョアジーの闘争」の社会経済思想的弁護論という一面をもっていたのである⁷¹⁾。これによって *Du Gouvernement moderne* における BALZAC の心理的過程が明らかになる。即ち、légitimiste を自認し、プロレタリアートおよびブルジョアジーに非情な態度を示しながらも、なお BALZAC は正統王朝派の機関誌 *Rénovateur* の読者に対して、能力のみ

に基づく不平等を主張し、貴族階級の門戸を解族するように要求せざるを得なかったのである。

一方、*Le Médecin de Campagne* において BALZAC が描く理想的社会の構造は、「産業社会」の構造とより緊密に一致している。Benassis の村の住民は能力によってのみ不平等であり、「もろもろの社会的種 les espèces sociales」を結ぶ「絆」(M. 77) としての宗教によって、「唯一つの家族を形成している」かのようである。指導者 Benassis は、「利己心から脱却」し、愛と自己放棄というキリスト教的美徳の具現者として、神人的に住民の運命を切り開いていき、彼が村で出会うのは「服従と友情」(M. 148) のみであった。SAINT-SIMONIENS によれば、「産業社会において……到る所に存在する権威は合法的である、指導者は有能であるから。到る所に存在する服従は自由である、指導者は愛されているから。」(*Doctrine*, 272 note)。これら「産業社会」の指導者たちは「新キリスト教」の信奉者であり、彼らの下において、人々は「唯一つの家族を構成し」(*Doctrine*, 332)、従って「搾取し合うのではなく、互に愛し合い、助け合わなければならない」(*Doctrine*, 256)。

Benassis の村では、住民全体が「産業者」又は「勤労者」という一つの階級に包含され、従って階級対立は存在しない。ブルジョアジーに属する医師 Benassis はその頂点に位置する銀行家であり⁷²⁾、企業家であると同時に、SAINT-SIMONIENS が人類の指導者と見做す《Savants》の一人であり、聖職者でもあるのである⁷³⁾。

BALZAC の絶対的支配の提唱については、ENFANTIN と BAZARD が LA FAYETTE に対して独裁政権を引受けるように提案したことが想起されよう⁷⁴⁾。勿論 *Le Médecin de Campagne* の世界は、「利己主義に基礎を置く」ブルジョア社会の批判を出発点としていることは否定し得ない。しかし、Benassis-Balzac の行う文明化への改良事業は、当時の時代精神に即応したものであった。「経済人」的人間への無条件の信頼にみられるように、BALZAC のブルジョア精神はそのような時代精神に容易に共感することができたのである。SAINT-SIMONIENS もまた資本主義生産の無政府性の批判を立論の基礎としている。が、彼らは窮極においてフランス産業革命を促進することによって資本主義体制の確立に力を致したのである。但し、ここで特に留意すべきは、légitimiste として *Rénovateur* の読者に対して「現実の貴族」の承認を求めた BALZAC が、*Le Médecin*

de Campagne においては、ブルジョアジーの立場から、ブルジョアジーに対しては闘争の中止を、プロレタリアートに対しては「自由な服従」を力説している点である。SAINT-SIMONIENS、特に彼らの《pères》が七月革命、Lyon 暴動に際して行ったように⁷⁵⁾。

以上のように、BALZAC は、*Le Médecin de Campagne* において、社会の上層階級間の闘争に影響されると同時に、プロレタリアートからも左右されるプチ・ブルジョアジーの、本質的にはブルジョアジーの一社会集団、SAINT-SIMONIENS の「産業社会」の具体的な形象化を、彼の意に反して行ってしまったと言えよう。

VI

BALZAC のユートピアは、天才的な指導者の独裁的な支配によって、奇跡的に矛盾を克服した資本主義社会であり、BALZAC はブルジョア社会に尚ユートピアに通じる道を見出すことができたのである。それ故彼が Benassis の改良事業とその結果について、一瞬懐疑的になるとしても (M. 57)、変革の達成される手段とその結果については、或る程度の自信を抱いていたとみななければならないだろう。Thomas MORE が、理想的パターンと現実との間隙をふさぐ手段を見出せず、絶望的な告白によって彼のユートピア物語を終えるのに対して、BALZAC は、訪問者 Genestas に、たとえ「退役後」という条件付きではあっても、彼のユートピアに来て余生を送るという約束をさせるのである (M. 275)。

事実、*Le Médecin de Campagne* の完成後、BALZAC は CARRAUD 夫人に次のように書き送っている。

「……私は安らかに死ねると思います。国のために偉大なことを成し遂げたのですから。私の考えでは、この本は法律や勝ち戦さよりも価値のあるものです」(C. 141)。

これに対して、CARRAUD 夫人は BALZAC が書くべき本を書いたと絶讃している (C. 143-145)。一方、王党派はこの作品をどのように迎えたか。《Par des torrents d'injures !》(C. 149)。彼らは légitimiste としての BALZAC の配慮など一向に斟酌しかなかったのである。このような現実に直面して、BALZAC が採るべき道は少数の選良の間に逃避するか (C. 149)、「ヨーロッパの精神界を支配⁷⁶⁾」すべく、現実に再び挑戦す

るかのいずれかであった。そして6年後、*Le Curé de village*において、彼は再びユートピアの建設を試みるであろう。が、Montégnacで改良事業を行う指導者たちは彼らの政治談義の席で、Benassisのように、《… je crois avoir assez prouvé mon attachement à la classe pauvre et souffrante, je ne saurais être accusé de vouloir son malheur》(M. 157) などと言わない。彼らは、自分たちが「攻撃されている階級⁷⁷⁾」の代表者であることを明確に意識している。一方《le dévouement du peuple》は、Montégnacの恩人であり、「貴族化した庶民」であるVéronique Graslinのうちに脈うつであろう。この推移の背後に何が起ったのか？ また*Le Curé de village*の世界像とは？ これを解明するのが、我々の次の課題になるだろう。

註

- (1) テキストはH. de BALZAC, *Le Médecin de Campagne*. Editions Garnier Frères を使用し、引用文の後に例えば(M. 56)と略記した(数字は頁数)。但し随時Pléiade版、Guy le Prat版を参照した。
- (2) Cf. M. BARDÈCHE, *Balzac romancier*, Plon, 1944, P. 234. 尚BALDÈCHEはこの作品が*La Peau de chagrin*と同一の構成をもっていることを指摘している。Ibid., p. 224 sqq.
- (3) H. de BALZAC, *Le Médecin de Campagne*, Garnier-Flammarion, Préface par P. CITRON, pp. 21—22.
- (4) *Echo de la Jeune France*, cité par B. GUYON, *La Pensée politique et sociale de Balzac*, A. Colin, p. 668 note 1.
- (5) BALZACのユートピアはDauphiné地方に位置し、Genestasがそこを訪れるのは1829年の春である。Benassisによる変革は社会変革の《microcosme》(P. CITRON, *op. cit.*, p. 22)であり、それによってBALZACが国全体の変革を考えていたことは、Benassisの次の言葉によって明らかであろう。《Sans doute, ce que nous avons fait pour ce canton, tous les maires devraient le faire pour le leur, le magistrat municipal pour sa ville, le sous-préfet pour l'arrondissement, le préfet pour le département, le ministre pour la France, chacun dans la sphère d'intérêt où il agit》(M. 54)。また、村の指導者たちの政治談義において、より直接的に理想的な国家形態が論じられる。
- (6) G. ルカーチ, 「バルザックとフランス・リアリズム」, 男沢淳・針生一郎訳, 岩波書店, pp. 25—26.

- (7) Cf. *Un inédit de Balzac: «Le Catéchisme social»*, précédé de l'article: «*Du Gouvernement moderne*». Textes établis et commentés par B. GUYON, la Renaissance du livre, p. 177 note 39.
- (8) もっとも, BALZAC 自身これら二作品の違いについて, *Le Médecin de Campagne* を「近代的博愛の応用」, *Le Curé de village* を「カトリック的悔悟の応用」と説明している。Préface de BALZAC dans l'édition de 1841 du «*Curé de village*».
- (9) ユートピア思想については, A.L. モートン, 「イギリス・ユートピア思想」, 上田和夫訳, 未来社, に負うところが多い。
- (10) 遅塚忠躬, 十九世紀前半におけるフランスの農業と土地所有, 高橋幸八郎編, 「産業革命の研究」, 岩波書店, p. 392.
- (11) J. ピョジエ, 「フランスに於ける土地分散」, 農林省農地部訳, pp. 15—16.
- (12) 森恒夫, 「フランス資本主義と租税」, 東大出版会, p. 115.
- (13) 1アルパンの面積は地方によって異なる。ここでは一応 Grand Larousse により, arpent ordinaire を採った。
- (14) E. LAVISSE, A. RAMBAUD, *Histoire générale*, A. Colin, t. x, p. 378.
- (15) この点, *Du Gouvernement moderne* においても同様であるが, *Le Médecin de Campagne* において, «…une grande diffusion de lumières pour faire accéder à la propriété le plus grand nombre possible de prolétaires» という文が削除されるのは, 1845年版においてである。
- (16) R. ガローディ, 「近代フランス社会思想史」, 平田清明訳, ミネルヴァ書房, p. 175.
- (17) 高橋幸八郎, 「市民革命の構造」, 御茶の水書房, p. 213 sqq.
- (18) 堀越忠躬, 前掲論文, p. 382.
- (19) B. GUYON, *op. cit.*, p. 668.
- (20) J.-H. DONNARD, *Les réalités économiques et sociales dans la Comédie Humaine*, A. Colin, p. 185.
- (21) R. ガローディ, 前掲書, p. 171.
- (22) H. de BALZAC, *Le Bois de Boulogne et le Luxembourg, Œuvres Diverses*, éd. Connard, t. III, p. 56. (以下 O.D. と略す)。
- (23) 大河内一男, アダム・スミスにおける「人間」の問題。アダム・スミスの会・大河内一男編, 「アダム・スミスの味」, 東大出版会, p. 143 sqq.
- (24) J. N. シュクラール, 「ユートピア以後——政治思想の没落——」, 奈良和重訳, 紀伊国屋書店, p. 7.
- (25) J.-B. SAY は, 一般的過剰生産も結局需要供給の法則によって解消されるという楽観的な見通しをもっていたのであるが, この点について, BALZAC は次のように

- 述べている。《Toute erreur en économie rurale, politique ou domestique, ne constitue-t-elle pas des pertes que l'intérêt rectifie à la longue?》(M. 58).
- 尚, BALZAC と自由主義経済学者 F. BASTIAT との関係については, J. クチンスキー, 「文学・経済学試論」, 中村英雄訳, 未来社, を参照。
- (26) 《Dès que le paysan passe de sa vie purement laborieuse à la vie aisée ou à la possession territoriale, il devient insupportable》(M. 64).
- (27) 《…l'œuvre de Balzac…constituerait la seule grande expression littéraire de l'univers structuré par les valeurs conscientes de la bourgeoisie; individualisme, soif de puissance, argent, érotisme qui triomphent des anciennes valeurs féodales de l'altruisme, de la charité et de l'amour.》L. GOLDMANN, *Pour une sociologie du roman*, Gallimard, pp. 34—35.
- (28) Éd. 1833. Cf. éd. Garnier, p. 290 note 186.
- (29) Cf. B. GUYON, *op. cit.*, p. 648.
- (30) G. ルカーチ, 前掲書, p. 25.
- (31) テキストは, *Un inédit de Balzac: «Le Catéchisme social»*, précédé de l'article: *«Du Gouvernement moderne»*. Textes établis et commentés par B. GUYON. を使用し, 引用文の後に例えば (G. 68) と略記した。数字は頁数を表わす。
- (32) BALZAC は, 1832年6月, Chinon で légitimiste として立候補している。落選。その時の政治綱領が *Essai sur la situation du parti royaliste* であり, 同年の5月と6月に正統王朝派の機関誌 *Rénovateur* に掲載された。*Du Gouvernement moderne* はその続編である。BALZAC はこれを9月頃書き上げ *Rénovateur* の主筆 LAURENTIE に送ったが, 何故か掲載されず, そのまま彼の生存中発表されることがなかった。
- (33) BALZAC が《légitimiste convaincu》となるのは, E.-R. CURTIUS によれば, *Essai sur la situation du parti royaliste* 執筆以後, B. GUYON によれば, *Le Départ* (1831年12月) 執筆以後である。E.-R. CURTIUS, *Balzac*, Editions Bernard Grasset, p. 232. B. GUYON, *op. cit.*, p. 489 sqq.
- (34) B. GUYON, *La Création littéraire chez Balzac*, A. Colin, p. 167.
- (35) 《Si le sentiment religieux périt chez une nation, elle devient séditieuse par principe, et le prince se fait tyran par nécessité. Les Chambres, qu'on interpose entre les souverains et les sujets, ne sont que des palliatifs à ces deux tendances》(M. p. 158). ここに言う《les Chambres》が貴族院と考えられるにすぎない。
- (36) 安士正夫, 「バルザック研究」, 東京創元社, p. 194.
- (37) 先ず, 民衆観を述べる前に, Benassis は次のような前置をする。《…je crois

avoir assez prouvé mon attachement à la classe pauvre et souffrante, je ne saurais être accusé de vouloir son malheur》(M. p. 154). また、Benassis の料理女 Jacquotte 夫婦の次のような会話を挿入している。《Ne voilà-t-il pas ce pauvre cher homme qui leur conseille d'écraser le peuple! et ils écoutent ... —Je n'aurais jamais cru celà de M. Benassis...》(M. 154).

- (38) BALZAC は1834年版まで次のように書いていた。《... à chacun son champ, est la consécration de la propriété due aux efforts de l'intelligence.》彼は1836年版で《intelligence》を《travail》に書き換えるのである。Cf. Ed. Garnier, pp. 159 et 334 note 904.
- (39) Ph. VIGIER, *La Monarchie de juillet*. 《QUE SAIS-JE?》pp. 18 et 21.
- (40) *Ibid.*, pp. 17 et 23.
- (41) *Lettres sur Paris, O. D.*, t. II, p. 75.
- (42) A. NETTEMENT, *Histoire de la Littérature française sous le gouvernement de juillet*, J. Lecoffre, p. 38.
- (43) Cf. M. LEROY, *Histoire des Idées sociales en France*, Gallimard, t. II, pp. 329—330.
- (44) Cf. Th. MAINAGE, *Les Mouvements de la Jeunesse Catholique Française au XIX^e siècle*, Desclée, De Brouer, p. 63.
- (45) *Ibid.*, p. 73.
- (46) S. CHARLÉTY, *Histoire du Saint-Simonisme* (1825-1864), Editions Gonthier, p. 72 sqq., en particulier pp. 77 et 80. この「教義の解明」は1830~1832に行われた二回目のものである。
- (47) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition. Première année, 1829*. Nouvelle édition publiée avec introduction et notes par C. BOUGLE et E. HALEVY, Marcel Rivière, p. 91.
- (48) S. CHARLÉTY, *op. cit.*, pp. 88—89.
- (49) *Lettres sur Paris, O. D.*, t. II, pp. 73—74. BALZAC と SAINT-SIMONIENS との関係については, cf. B. GUYON, *La Pensée.*, p. 315 sqq., B. TOLLEY, *Balzac et les Saint-Simoniens, L'Année balzacienne*, 1966, p. 459 sqq.
- (50) B. GUYON, *op. cit.*, p. 649, Ph. BERTAULT, *Balzac et la Religion*, p. 443 sqq.
- (51) Ph. BERTAULT, *op. cit.*, p. 481.
- (52) *Artisan*, Prospectus du 22 septembre 1830, cité par M. LEROY, *Histoire des Idées sociales en France*, t. II, p. 405.
- (53) A. NETTEMENT, *op. cit.*, p. 214.
- (54) Cf. *Correspondance*, Garnier, t. I, p. 504.
- (55) R. ガーロディ, 平田清明訳, 前掲書の引用による。p. 250.

- (56) *Ibid.*, p. 247.
- (57) M. LEROY, *op. cit.*, p. 405.
- (58) *Ibid.*, p. 408.
- (59) Cf. S. CHARLÉTY, *op. cit.*, p. 93.
- (60) *Doctrine.*, p. 203.
- (61) 坂本慶一, 「フランス産業革命思想の形成」, 未来社, p. 259.
- (62) 篠田浩一郎, 「フランス・ロマン主義と人間像」, 未来社, p. 56 sqq.
- (63) *Correspondance avec Zulma Carraud*, Gallimard, p. 49. 以下, 引用文の後に例えば (C. 77) と略記した。数字は頁数を示す。
- (64) B. GUYON, *La Pensée politique.*, p. 612.
- (65) *Traité de la vie élégante, O. D.*, t. II, p. 153.
- (66) *Correspondance*, Garnier, t. II, p. 141.
- (67) B. GUYON, *op. cit.*, pp. 628—629.
- (68) H. J. ラスキ, 「イギリス政治思想史II」, 堀豊彦・飯坂良明訳, 岩波現代叢書, p. 69.
- (69) M. LEROY, *op. cit.*, t. II, p. 145.
- (70) ここで, *Le Médecin de Campagne* の主要なテーマの一つである《Le Napoléon du peuple》に触れておかなければならない。BALZAC が Napoléon を讃美するのは, 彼がこのような理想的な国家形態を帝政に見出すからであり (M. 179-180), Napoléon の指揮は, Benassis の指導と同様, 利己心を発動せしめることに基づいている (M. 170, 172)。また, B. GUYON が指摘するように, Napoléon の超人的な性格が強調される (B. Guyon, *La Pensée politique.*, p. 654)。即ち Benassis が《image de Christ》であるように, Napoléon は《enfant de Dieu》として描かれる (M. 171, 187)。このような Napoléon は, 同時にまた, 人民の父, 兵士の父として描かれ, その家父長的性格が強調される (M. 170, 171, 180, 189)。そして Benassis とは《c'est, sauf les batailles, le Napoléon de notre vallée》 (M. 273) なのである。この意味で, ルカーチが指摘するように, BALZAC の Napoléon 崇拜は「詩人の歴史的世界像における必然的補足」と言えるのである。
- (71) R. ガローディ, 前掲書, pp. 190-191.
- (72) SAINT-SIMONIENS によれば, 土地と資本という労働手段が「各人の能力に応じて」分配され, 土地所有者と資本家はこれら労働手段の保管者として, 不可分のものである (*Doctrine.*, pp. 256-257, S. CHARLÉTY, *op. cit.*, p. 86)。産業社会では, 銀行家が「一つの社会機関」を通して「すべての物質的事業を指揮する」, つまり, 「生産を管理し, 生産を消費と調和させ, 労働手段を最も適した産業者に委託する」という職能を執行する。「この機関は, 産業者の能力を発展させる最良の地位にある」 (*Doctrine.*, p. 261)。これに対して, Benassis の村では, 前述のように, すべ

ての産業者が自由に生産しているのであるが、彼らの配置が、Benassisのvisionに従って決定され、その統一のもとにあることを見逃すことができない。BALZACが資本家、土地所有者にあたえている役割は(M. 43, M. 242)に見られる。また、上述の意味におけるBenassis-banquierについては、cf. M. 38, M. 43.

(73) B. GUYONはBenassisを《une espèce de saint laïc》と呼んでいる。(B. GUYON, *op. cit.*, p. 646). Cf. M. BARDÈCHE, *op. cit.*, p. 225.

(74) S. CHALÉTY, *op. cit.*, p. 74.

(75) *Ibid.*, pp. 73 et 93.

(76) *Lettres à l'Etrangère*, t. I, p. 43.

(77) *Le Curé de village*, Bibl. de la Pléiade, t. VIII, p. 720.

(追手門学院大学文学部講師)